

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2018 梶谷真司

ライセンス:

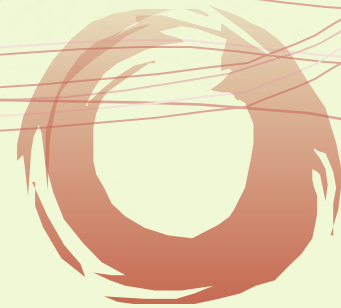
利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

One Health

文化現象としての健康と病



梶谷真司（大学院総合文化研究科）
哲学・比較文化

病気の歴史

社会や生活の変化によって病気が変わる

- 農耕の開始→伝染病（が問題になる）
- 感染症の克服→慢性疾患の増加
- 高齢社会→ガンの増加
- 家の気密性の向上→シックハウス症候群

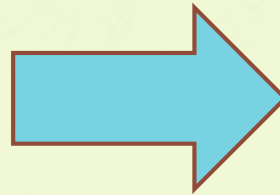


死に方の歴史

昔

【死因】
感染症
伝染病

—
集団的生死
外から襲来



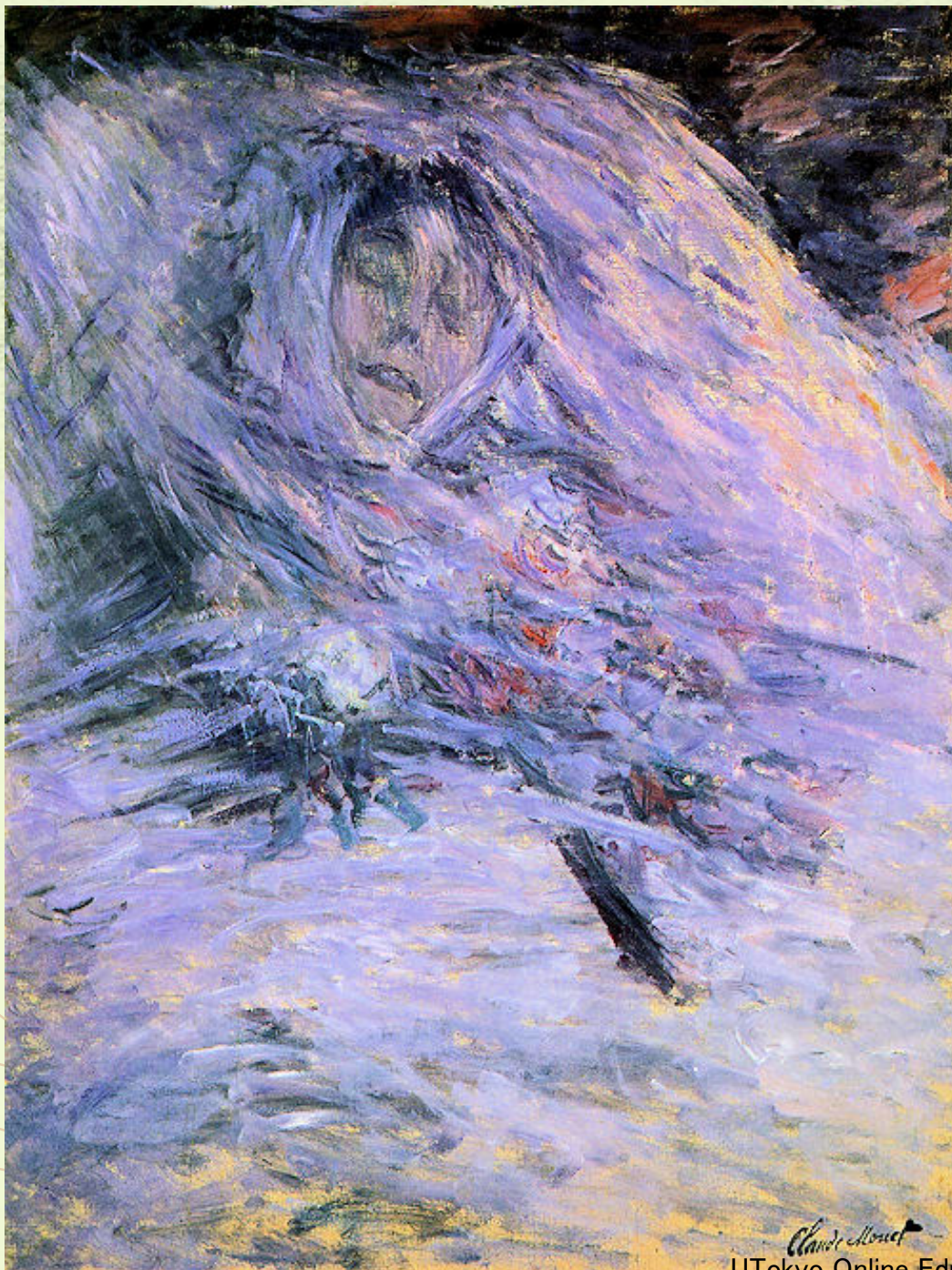
今

【死因】
慢性疾患
ガン

—
個人的生死
中から浸食



ブリューゲル「死の勝利」(1562頃)



モネ 「死の床」 (1879)

病気の二つの次元

どんな病気にも異なる二つの次元がある

disease : 科学的・客観的異常

illness : 文化的・主観的不調



身体的な異常と精神的な不調は一致しない
時代や文化による病気や健康のとらえ方の違い



病気とそのイメージ

病気のイメージによって態度が異なり、時に差別を生む

- ハンセン氏病：業病（カルマを負った病）
- 結核：繊細な人間の病
- エイズ：同性愛者の病
- ガン：戦って駆除すべき敵
-



近代以前と以後

身体観の違いで病気のとらえ方も変わる

以前：流体としての身体

——気の滞り・漏れとしての病

以後：固体としての身体

——構造・機能の不全としての病

|

食事、運動、入浴、言動、睡眠すべての意味が異なる
衛生観念の有無

洋の東西①

人間観によって医学の性格が違う

東洋：気の一元論→病気を身体に還元する

西洋：心身二元論→心と体の病気を分ける

｜

東洋医学に精神病がない（すべては臓の病）、西洋医学では役割分担

西洋は個人や人間関係に向き合わせるが、東洋ではそれを回避

洋の東西②

社会を構成する原理によって行動が変わる

東洋：集団主義→身体は家族のもの

西洋：個人主義→身体は個人のもの

↓

がん告知は西洋では本人が先、東洋では家族が先



医療のタイプの違い

西洋でも国によって医学のタイプが違う

アメリカ：ガンの徹底駆除→乳房全摘

フランス：ガンとの共存→乳房温存

—

長生きと幸福のどちらを優先するかが違う

健康の観念の違い？



健康・病と文化

- 健康も病気も、その社会の文化や歴史との関連の中で理解され、対処される。
- 理解と対処のあり方が社会的個人的生活全体とバランスが取れていないと問題が深刻になる。
- 健康だけでなく、病気に対しても、望ましい関わり方がある。

参考文献

大貫恵美子『日本人の病気観 象徴人類学的考察』岩波書店 1985

リン・ペイヤー『医療と文化』世界思想社 1999

シゲリスト『文明と病気 上・下』岩波書店 1973

ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄』草思社 2000

David Moris, *Illness und Culture in the Postmodern Age*,
University of California Press 1998

